

「日本子ども学会」10年の歩み

「日本子ども学会」の設立

日本子ども学会は、2002年にスタートしたCRNの「子ども学研究会」に端を発します。同研究会は、日本子ども学会の小林登理事長が1980年代から提唱していた学際的な子ども研究の集まりとして、活動を始めました。同研究会が、従来の子ども関連の研究会と異なっていた点の一つは、進化生物学、脳神経科学、認知科学などの自然科学系の視点も含めて子どもを研究の対象としているところでした。この10年間、ヒューマン・サイエンスの進展には著しいものがあり、日本子ども学会も、そのような流れに沿って活動を展開してきたといえます。

2003年11月29日、白百合女子大学で行われた設立総会で、「子ども学研究会」は「日本子ども学会」と名前を変え、誕生しました。設立総会の基調講演のテーマは「子ども学と進化生物学」。論者は東京大学の佐倉統助教授（当時）でした。基調講演に続くシンポジウムのテーマは、「子ども学の視点 文理融合科学の可能性と課題」で、パネリストは奈良女子大学の麻生武教授、東京大学の榊原洋一講師（当時）、東京大学の開一夫助教授（当時）でした。人文系と自然科学系の研究を融合することで、子どもの研究にどのような可能性が見えてくるのか、活発な議論が展開されました。

「子ども学会議」で子どもをトータルに論じる

日本子ども学会の活動の一つの大きな柱が、設立の翌年から毎年開催されてきた「子ども学会議」（日本子ども学会 学術集会）です。以下、各大会のメインテーマに焦点を当てて、内容の一部を紹介します。

まず、記念すべき第1回大会のテーマは、「メディア社会と子どもたち」でした。当時は、アニメやテレビゲームに夢中になる子どもの姿を逸脱行動であるかのように断罪する論者も多かったのですが、日本子ども学会では、発達の側面からニュートラルに論じてきました。

また、この時のポスター発表で子ども学大賞をとったテーマは、「世界中の子どもが鬼ごっこをするのはなぜか」（京都大学大学院理学研究科 島田将喜）で、嵐山モンキーパークのニホンザルが鬼ごっこの原型のような遊びをするという事実が発表されました。このような生物学的な考察を、ニッチな研究としてではなく、子ども、すなわち人間を知るための根源的な問い

として捉えることが、子ども学という学問の可能性の一つとして示唆されたといえます。

学問領域を超えて

第2回大会は、「多文化社会と子どもたち——未来をつくる共生と支援」をテーマに、国籍が違う両親に育てられた子どもたちや外国から移住してきた子どもたちの発達について論じられました。マイノリティーの子どもについての研究は、研究者の数も少ないのですが、2歳児が日本人の母親とアメリカ人の父親に対して、二つの言語を使い分けて対応するという山本雅代教授（関西学院大学）の発表に見られるように、思わぬ視点の刺激的な研究が、子どもの発達についての考察を豊かに発展させる可能性を持っていることを示した大会でした。

第3回大会のテーマは、「『子ども学』の未来を考えよう」。研究者だけではなく、小児科医、看護師、幼稚園園長、養護教諭など実践現場の先生方も含めたシンポジウムが行われました。そこで見えてきたのは、子ども研究の視座を広げて、文部科学省や厚生労働省が棲み分けている様々な制度や、それに準じた教育機関のカリキュラムを学際的にしていく可能性です。子ども学会の成果を、学会の発表や研究者同士の刺激的な交流だけに終わらせず、どのように社会に還元させ、次の世代へつないでいくのか、そのテーマは今でも、日本子ども学会の課題として残されています。

第4回大会のテーマは、「子ども・進化・脳科学——生命の科学と『子ども学』」。「子ども」を生命現象としてとらえ、そのメカニズムを生命の科学、特に「進化」と「脳」の視点から読み解こうという趣旨で行われました。

この大会で注目すべきは、「教育」という営みが、他の生物と異なるヒトの特徴としてクローズアップされたことでした。他の個体の行動を修正しようとしたり、技術や文化を意図的に伝えようとしたりする生き物は、ヒト以外には見られないということです。そのほかのプログラムも、「教育」や「学習」そのものを、それぞれがそれぞれの立場で再考する大きな刺激となる講演やシンポジウムが続きました。

現代社会の課題の解決を探る

第5回大会のテーマは、「問題としての子どもの存在としての子どもへ——いじめ理解を深めるため

「日本子ども学会」10年の歩み

2003年 11月29日	「日本子ども学会 設立総会」開催 ——白百合女子大学（東京）	白百合女子大学にて設立総会を開き、全国から集った多数の参加者の賛同を得て、「日本子ども学会」設立 同日、引き続いて基調講演「子ども学と進化生物学」、シンポジウム「子ども学の視点——文理融合科学の可能性と課題」、特別講演などが行われた
2004年 3月31日	学会誌『チャイルド・サイエンス』創刊	A4版、毎年3月発行（2号目からの記述は略す） 2012年度で通巻9号となった
2004年 9月4日・5日	第1回「子ども学会議（日本子ども学会学術集会）」開催 ——早稲田大学 国際会議場（東京）	テーマ『メディア社会と子どもたち』 大会長：榊原洋一（東京大学医学部講師） 教育講演「子ども学とは何か—育つ育てる」、特別講演「野生のゴリラと野生の子ども」、シンポジウム「徹底討論 幼児のメディア視聴は是非か?」 「子どもとメディアの未来を考える」ほか
2005年 2月19日	「子ども学研究会」開催 ——白百合女子大学（東京）	宮下孝広教授（白百合女子大学）の開会挨拶のあと8件の発表が行われ、活発な議論がなされた
2005年 9月3日・4日	第2回「子ども学会議」開催 ——東京大学（東京）	テーマ『多文化社会と子どもたち——未来をつくる共生と支援』 大会長：牛島廣治（東京大学大学院教授） シンポジウム「文化間移動と子どもの発達」ほか
2006年 9月2日・3日	第3回「子ども学会議」開催 ——甲南女子大学（神戸市）	テーマ『「子ども学」の未来を考えよう』 大会長：稲垣由子（甲南女子大学教授） シンポジウムのほか、子ども参画授業のワークショップなども
2007年 9月15日・16日	第4回「子ども学会議」開催 ——慶應義塾大学（東京）	テーマ『子ども・進化・脳科学——生命の科学と「子ども学」』 大会長：安藤寿康（慶應義塾大学教授） シンポジウム「進化の中の子ども」「子どもと世界の異なる出会い」 「脳科学から見た子どもの教育」ほか
2008年 9月27日・28日	第5回「子ども学会議」開催 ——奈良女子大学（奈良市）	テーマ『問題としての子どもから存在としての子どもへ——いじめ理解を深めるために』 大会長：浜田寿美男（奈良女子大学教授） シンポジウム「いじめの背景となる子どもたちの仲間関係」 「いじめを再定義する」ほか
2009年 9月12日・13日	第6回「子ども学会議」開催 ——お茶の水女子大学（東京）	テーマ『子ども・環境・脳科学』 大会長：内田伸子（お茶の水女子大学大学院教授） シンポジウム「いま、早期教育を考える」「子どもとゲームをめぐる過去・現在・未来」「良質のチャイルドケアリングとは」「子育てを手助けする“頼りになる情報環境”の構築に向けて」ほか
2010年 10月2・3日	第7回「子ども学会議」開催 ——川越市民会館（川越市）	テーマ『子どもサポートの統合——危機にある子どもたち』 大会長：渡部 茂（明海大学教授） シンポジウム「子どもを煙草から守る」「発達障害：自閉症をめぐる」 「子ども虐待：子どもの医療関係者による虐待早期発見と予防」 「子どもの傷害予防に取り組む」「子どもの貧困を根絶していくために」ほか
2011年 8月18～22日	「東日本大震災・子ども応援プロジェクト」の小豆島サマーキャンプを共催	2011年3月の東日本大震災で津波被害に遭った仙台市の小学生34名を小豆島につれて行き、サマーキャンプを行った
2011年 10月1日、2日	第8回「子ども学会議」開催 ——武庫川女子大学（西宮市）	テーマ『育ちと学びを支える』 大会長：河合優年（武庫川女子大学教授） シンポジウム「小児医療から見た子どもの育ち」「震災の子どもたちを支える——今、何が起きていて何が求められているのか」ほか 10月2日には文仁親王妃紀子殿下のご臨席を賜った
2012年 5月25日	第1回「子ども学カフェ」開催 ——慶應義塾大学（東京）	講演『進化生物学から見た“子ども”と“思春期”』（長谷川真理子教授）とディスカッション 研究開発委員会の事業の一つで、この年より始まった
2012年 10月20日、21日	第9回「子ども学会議」開催 ——JST 東京本部別館（東京）	テーマ『子どもの生きる力を育む：エンパワメント環境づくりに向けて』 大会長：安梅勲江（筑波大学大学院教授） シンポジウム「子どもの生きる力を育むエンパワメント」、 ワークショップ「つながる、かがやく、ひびく おもちゃエンパワメント」ほか
2013年 2月23日	第2回「子ども学カフェ」開催 ——慶應義塾大学（東京）	講演『遺伝子は“不都合な真実”か』（安藤寿康教授）とディスカッション
2013年 10月12日、13日	第10回「子ども学会議」開催 ——岡山県立大学（総社市）	テーマ『つながるチャイルド・サイエンス 遊びと学び——おもちゃ・ロボット・メディア』 大会長：渡辺富夫（岡山県立大学教授） シンポジウム「つながるチャイルド・サイエンス」、 10周年記念シンポジウム「チャイルド・サイエンスの未来」ほか

に」。同大会では、社会学、教育学、心理学などの人文科学系の研究者が中心となって発表を行い、現場に詳しい研究者たちが優れたいじめ解釈を示し、議論は深まりましたが、具体的な解決策については意見が分かれられました。安易に解決策を求めること自体が間違いだという考え方も示されましたが、いじめで自殺する子どもがいるという事実の重さを考えれば、やはりなんらかの解決策・現場の知を集めていくことが、今後の子ども学会の役割として求められているのかもしれませんが。

第6回大会は「子ども・環境・脳科学」をテーマに先端科学の知見を持ち寄り、子どもの養育環境のデザインを探るという趣旨でした。

基調講演では元お茶の水女子大学学長の本田和子先生が、「子どもが忌避される時代」と題し、子どもを慈しむことが当たり前であった日本人のメンタリティが変化してきていると指摘、そのような傾向に危機を示しました。さらにシンポジウムでは、「早期教育」と「ゲーム」がテーマに取り上げられ、子どもの健やかな発達を促す環境はどうあるべきか、社会の変化を踏まえた上で、古くて新しい問題が改めて論じられました。

第7回大会は「子どもサポートの統合——危機にある子どもたち」がテーマでした。大会長の渡部茂先生は小児歯科医ですが、大会ではその領域を超えて、発達障害、虐待問題、貧困問題、喫煙、食育などについても論じられ、子ども学と専門分野が架橋される可能性を示唆する大会となりました。

また、社会全体の子どもの成育環境をサポートする力が衰えていることが、あらゆる分野で、子どもへの総合的な関わりが求められる原因の一つになっているのではないか、という問題提起もなされました。

被災した子どもたちを支える

第8回の学術集会は「育ちと学びを支える」をテーマに、1日目を「子どもの育ちと学び」、2日目を「東日本大震災の子どもたちを支える」として開催されました。奇しくも会場となった武庫川女子大学は1995年に起きた阪神淡路大震災の被災地、兵庫県西宮市にあり、その経験や情報を共有するのに、ふさわしい会場となりました。

阪神淡路大震災を経験した子どもたちを支援してきた神戸市教育委員会事務局の中溝茂雄氏は、震災の影響は長期に及ぶので、子どもの支援も長期にわたる見守り体制が必要であることを訴え、震災遺児を支援す

る活動を行っている「あしなが育英会」の八木俊介氏は、遺児たちの悲しみ方は千差万別であること、遺児たちを世話する大人たちも被災者であり、そのケアも遺児支援の一環であることなどを指摘しました。また、東日本大震災で自らも被災しながら、被災地域におにぎりを届ける活動をしてきた仙台白百合女子大学の大坂純教授は、「被災者自らが持っている、自分なりのやり方で生活を取り戻す力を尊重しながら寄り添うことが必要」と話し、大会長の河合優年教授は、子どもたちの支援を長期的に継続して行っていくことが重要であると強く訴えました。

なお、この大会では2日目に文仁親王妃紀子殿下がご臨席になり、終日、議論に耳を傾けておられました。

子どもたちのために

第9回大会は、子どもたちが「生きる力」を未来に向かって最大限に発揮する仕組みづくりをテーマに、「子どもの生きる力を育む——エンパワメント環境づくりに向けて」と題して行われました。木工細工を通じて味わう木の感触、手遊びによるおもちゃの楽しさなどをワークショップなどで体感しながら進められたプログラムは、学会に参加した“大人”たちの感性も大いに刺激することになりました。被災地からのレポートもあり、子どもたちに夢や希望や勇気を与えるような環境づくりの必要性が、被災地で、そして日本中で求められていることを改めて感じた大会となりました。

*

日本子ども学会ができて10年。この間に、赤ちゃんや子どもを理解するための知見は確実にレベルアップし、子ども研究の輪は、研究者以外にも大きく広がってきました。しかし、それとは裏腹に、子どもたちの置かれている成育環境はいよいよ厳しい状況にあります。子どもの虐待件数が上昇を続けており、貧困率が高まっていることなどは、その象徴です。

2009年に行われた第6回大会の冒頭、小林登理事長は、「チャイルド・ケアリング・デザイン」と題して代表講演を行い、「子どもを取り巻く生活環境のすべての“コト”や“モノ”は、子どもの目線に立って、子どもの心を読み取る優しい心でデザインしなければならない」と述べました。この先も日本子ども学会は、現代を生きるすべての子どもたちのために活動し、研究成果を社会に還元するなかで、子どもたちの今と未来を照らす灯りをともし続けていきたいと考えています。